

IASB 赴任の報告と御礼

IASB 客員研究員 みうら あけみ
三浦 朱美

昨年夏からの企業会計基準委員会（ASBJ）への出向を経て、本年から客員研究員として国際会計基準審議会（IASB）に赴任しております。

当方は解釈チームに所属し、IFRS 解釈指針委員会（以下「委員会」という。）への新規要望への対応等を担当しています。また、IAS 第 19 号（従業員給付）担当として、情報収集や照会への対応等も行っているところです¹。

5月の委員会では、担当する論点3つについて、有意義な議論をしていただくことができました。特に、IAS 第 19 号の制度改訂・縮小等に伴う再測定に関する論点については、大変やりがいのある改訂に向けた議論が進められたように思います。（詳細は次号以降にて紹介できればと思います。）

また、委員会においては検討を止める決定をした Contribution-based promises 等の論点を含め、IAS 第 19 号の広範囲なりサーチプロジェクトについても担当しているため、こちらも今後、紹介していければと思います。

まだ業務をはじめたばかりの感想ですが、解釈チームの業務にあたっては以下の点を感じています。（なお、文中の意見にわたる部分はすべて筆者の個人的見解です。）

1. 委員会は、Due Process Handbook 上の条件を満たした場合、年次改善や解釈指針等のための議論を行うことができます²。一般的ではない課題の場合や、広範囲に本質的な原則・現行基準の再検討が必要となる可能性がある場合等も、委員会で検討を行うことは不適切な場合があります。（たとえば、前述の Contribution-based promises の論点も、IAS 第 19 号開発時には想定しなかったタイプの年金に関する会計という広範な課題の一部であり、IASB によるリサーチプロジェクトの中での検討が望ましいとして、委員会としては検討を止めることを決定しました。）
2. 委員会として議論する条件を満たさない場合は、議題には加わらないこととなります（アジェンダ・リジェクション）。アジェンダ・リジェクションは、ともすると何も行っていないかのように捉えられがちですが、以

1 IASB における個別照会等への対応方針は以下をご覧ください。

<http://www.ifrs.org/The-organisation/Pages/Technical-enquiries.aspx>

2 Due Process Handbook などを含む詳細は以下をご参照ください。

<http://www.ifrs.org/How-we-develop-Interpretations/Pages/Propose-an-agenda-item.aspx>

下のような点で望ましい時もあります。解釈自体よりも、こうした判断の方が悩ましく、丁寧な事実調査・分析の上、上司とも時間をかけて議論するところです。

- a. 新たなガイダンス・過度な説例が新たに意図せざる結果（実務的で原則に沿った会計処理検討の阻害など）を生むことを防ぐ。
 - b. 基準が明確であるためにリジェクションする場合、基準に基づく委員会の考えが迅速に外部に示される。
 - c. 一般的ではない課題や影響の少ない課題に対して限られたリソースを使用する非効率や、読み手である基準利用者に生じる無用なコスト（自社に影響のないことの確認等）を回避する。
3. チームといっても、原則、担当は一人で全作業を行います。優秀な上司はいますし、経験豊かな同僚や専門家等から助言・情報もいただけますが、ペーパー作成のみならず、調整、情報収集、会議説明等も含めて、ひとりでお自分で行うこととなります。やりがいはあるものの、期限直前まで深く情報収集や議論をしようとする結果、困難もあります。解釈チームのルールやサイクルが見えてきた次回以降、さらに高品質なアウトプットが出せるよう研鑽したいと思います。

いずれにしても、実務・適用の最前線近くでソリューションを求めていく解釈チームと、本質的な見直しを検討するIAS第19号リサーチプロジェクトの双方を担当できることは幸運に

思っております。担当以外のプロジェクト等も踏まえ、ダイナミックな環境の中で自分のプロジェクトを考える必要もありますし、統合報告等の多くの先端議論に触れる機会も多く、知的には面白い環境です。

また、職場は驚くほど多様性が高いです。国籍・経験の多様性は勿論、ワーキングマザーや普段ロンドン以外に住む研究者も珍しくなく、働き方も多様です。基準開発の経験豊かな人材とともに、出向者など多様な人材を活用することで、できる限り多くの観点から基準開発を進めているように思います。担当区分は明確ですが、お互いの専門に基づく知見を提供しあうこともあります。国際的な基準開発には、こうした多様性を生かせる環境が必須なのでしょう。IASBは国際的な組織運営においても学ぶべき長所を多々感じており、広い視野・スキルも獲得していきたいと思っています。

末尾となりましたが、当方の渡航・着任にあたっては、大変に多くの方からの励ましやご指導をいただきました。深く周囲の皆様へ感謝するとともに、高品質な基準開発・会計実務の発展に微力でも貢献することで、少しでもお返しできれば幸いです。ご関係者の皆様、あらためて、本当にありがとうございます。今後ともよろしく願い申し上げます。

（会計人材開発支援プログラムにも1期生として参加しておりました。そちらについては本誌20頁の「座談会「国際的な会計人材の発掘・育成に向けて」」をご参照ください。）